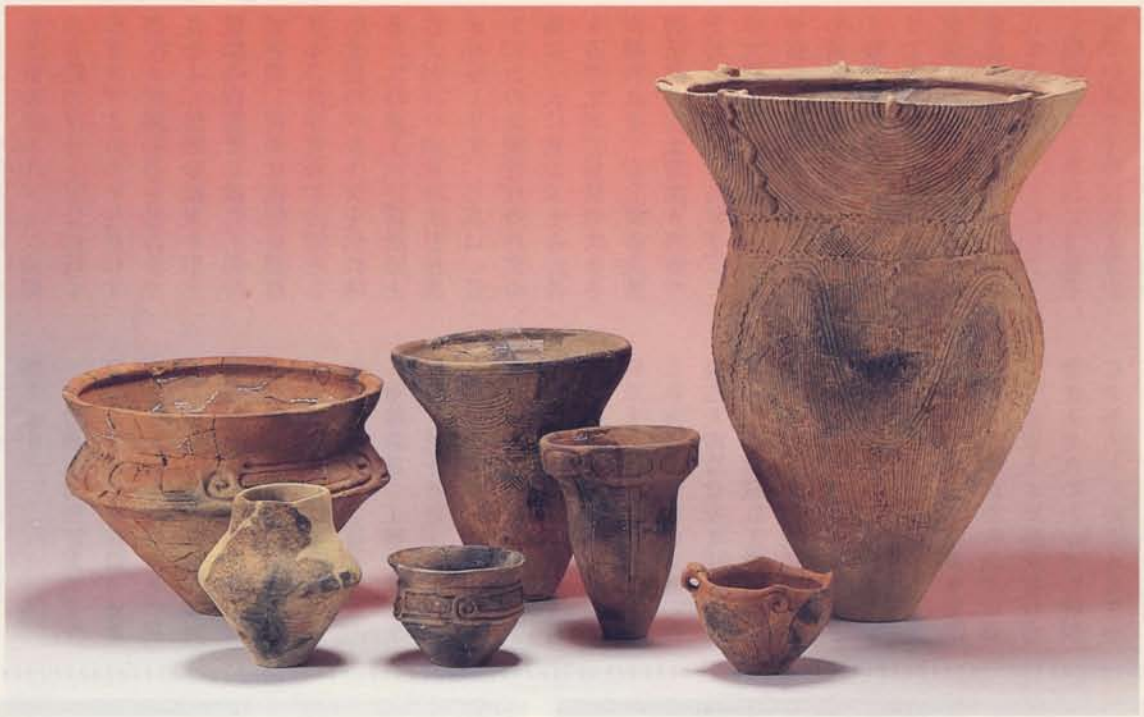
たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報　No.24　平成4年1月31日



縄文時代中期後半の土器群

No.300遺跡（八王子市南大沢）

縄文の村にて

カワラヒワ、ジョウビタキ、シジュウカラ、ツグミ、ヒヨドリ、ムクドリ、セグロセキレイ、オナガ、スズメ、キジバト、ハシボソカラス、開園して6年を経た遺跡庭園「縄文の村」で、この頃みられるようになった鳥の名である。樹木が高く、広がりをもつようになり鳥たちの訪れを間近に見ることができるようになった。町中になってしまったこの村にこれだけの鳥たちが訪れるようになったとは驚きである。

秋にはクルミやクリなどの他にムクロジの実も2～3年前から実るようになった。ムラサキシキブの実も見事な美しさを発揮するようになり、ハタケシメジという食用になるキノコも採取できるようになった。

縄文時代にはとても及ばないものの、次第に豊かになっている庭園の自然に囲まれ、住居内では生活復元として薪炊きや土器、弓矢などの展示が行われ、縄文土器作り教室の土器焼きが行えるようになった。都内ではこのような自然の中で見学ができるところが少ない。それだけでも希少価値をもっているが、この公園内で埋蔵文化財を中心としたテーマの下にさまざまな催し物ができるようになってきたことは楽しみである。

講演会や見学会など直接に遺跡や遺物を考える場であると共に体験学習の場として活用を考えて行きたい。

（千野裕道）

遺跡だより㉚

1号周溝墓の壺・高坏出土状態

今回は№916遺跡を紹介します。調査は現在も継続中ですので、ここでは弥生時代終末～古墳時代前期の内容を中心とします。

遺跡は町田市小山町に所在し、境川の北側に展開する丘陵の尾根上から谷にかけて立地しています。前回の遺跡だより㉗㉘で紹介した№344、924遺跡の東隣りに位置しています。

当該期の遺構として、竪穴住居跡17軒・周溝墓2基が検出されました。住居は、やせ尾根の上に15軒が分布し、尾根から東に下がった平坦部に2軒と、周溝墓2基が位置しています。

尾根上の住居群は、北側の9軒のグループと、南側の6軒のグループに分けられます。これらの住居はすべてが同時に存在したのではなく、住居の配置や出土遺物の内容を比較し、同時に存在していた住居を復原することが可能です。

北側のグループを例にみると（写真1）、住居の一辺が9.5mや8.5mの大型住居が存在します。写真は一辺が9.5mの大型住居の柱穴の脇に、人に立ってもらったものですが、住居の大きさが窺われます。2軒の大型住居は、出土遺物からみて同時存在は考えられず、この大型住居を中心に、一辺が3～4m規模の住居を含む4～5軒が同時に存在していたものと考えられます。また大型住居には、集団を統率するリーダー的人物が居住していたものと推定されます。

周溝墓は、東西に2基並んでいます。規模は1号が10×9m、2号が7.5×5.6m（いずれも周溝を含む）を測ります。

2号周溝墓の、墓の主を埋葬した施設からはガラス玉が出土しました。また周溝の中からは、墓の主に対して行われた祭りに使われた装飾壺・高坏・台付甕などの土器が出土しています（タイトル下の写真）。

遺物には、土器や鉄器・砥石・種子などがあり、これらをもとに人々の生活を復原することができます。

小山地区では本遺跡を含め、ほぼ同じ時期の住居150軒以上が調査されています。これらは一時期に全部が存在したのではなく、数世代にわたり継続して営まれたもので、5つの遺跡をまとめた単位が、当時の「ムラ」の一つを表わすものと考えられます。

今後の調査の進展を待って、なぜ平野や台地ではなく、丘陵上に集落を営む必要があったのかなどの疑問にお答えしていこうと思っています。（飯塚武司）

1．住居・北側グループ

2．13号住居跡の遺物出土状態

文化財講座〈20〉

縄文時代と人々 (8)

縄文人の食事

「縄文人は何をどのように食べていたのか?」という疑問を考えることは、その生活全体を復元するために極めて大切なことといえるでしょう。

縄文人の食料獲得のための手段は、簡単な栽培が行われていた可能性も指摘されていますが主な生業は狩猟・漁撈・採集であったと考えられ、クリやトチなどの堅果類やユリの根などの根茎類、イノシシやシカなどの獣類、サケやマスなどの魚類、アサリやシジミなどの貝類などをとって食べていたのでしょう。

では、これらの食料のカロリーはどのくらいあるのでしょうか。100グラム当たりのカロリーについて代表的な食料を計算してみると次のようになります。

オニグルミ672カロリー・サケ141カロリー・アサリ63カロリー・イノシシ147カロリー。

獣類や魚類などは、狩猟や漁撈において、その多くの場合、不確実性をともない、常に安定した量を得ることが難しいのに対して、堅果類は大量採集と貯蔵が可能であり、安定的な供給が可能で、加えてカロリーも高いということから食料としての効率性に優れているといえます。

ただ、一年中採集できるものではなく、貯蔵期間も限られているので、その採集が容易に行える内陸部などでは、植物資源が食生活において重要な位置を占めながら、動物資源もうまく利用して食生活を維持していたのでしょう。

また、これらの食料は様々な形で調理されていたと考えられますが、堅果類はドングリのようにアクを抜かないと渋くて食べられないものもあります。アク抜きの方法としては煮炊きによる加熱処理と水さらしによるものがあり、両者を併用して行う場合もあるようです。そして、これらのことを行う前には木の実を割ったり、すったりする必要があり、それにはたたき石・凹石・石皿などが利用されていたと考えられます。

アク抜きされた木の実はすりつぶして、その粉で団子状のものを作ったり、水と共にカユ状にしたりして食べたのでしょう。

肉類の料理法としては、石を利用した石焼きや石蒸しが行われていたようです。

動・植物資源の利用割合や調理法は時期や地域によって差がありますが、多摩ニュータウン地域に生活していた縄文人を例に取るならば、豊富な植物資源を背景とした食生活を営んでいたのでしょう。(西沢　明)

センター調査の概要

多摩ニュータウン地域では1月現在で8カ所の調査が行われています。最近、古墳前期を中心とした集落調査が特徴となっていますが、No.916遺跡については本紙・遺跡だよりで紹介しました。これに隣接したNo.918遺跡では古墳前期と後期を中心とした住居跡が50軒程も調査されています。No.197遺跡においても古墳前期の住居跡が13軒調査されていますが、現在はその下層の厚く堆積した崩落ローム下に縄文時代の土坑、植物化石層が発見されており、この調査に入っています。

多摩境駅に近いNo.938、939遺跡では埋没谷中に平安時代の住居跡が2軒調査され、縁釉陶器の完形に近いものが発見されています。尾根上のNo.939遺跡では弥生中期の住居が3軒発見されており、さらにその軒数が増えそうです。No.847遺跡(八王子市鑓水)からは古墳後期と平安時代の住居跡が調査されています。

No.113遺跡(八王子市下柚木)では縄文、平安時代の住居跡の他に近世寺院跡が発見されています。No.106、901遺跡(八王子市堀之内)は隣接して調査が行われていましたが、両遺跡合わせて約500基もの陥し穴土坑が発見されています。

稲城地区のNo.9遺跡(坂浜)の調査が続けられており、土器捨て場と思われる地点からは大量の縄文時代中期の土器片が出土しています。

尾張藩上屋敷跡を現在調査している市ケ谷分室では、奥と西御殿に該当する地点を含んだ3地点に分けて調査が行われています。(千野裕道)

映画班、土師器を撮影